

## 博士(文学)学位請求論文審査報告要旨

論文提出者氏名	伊東 久智
論文題目	「院外青年」運動の研究―日露戦後～第一次大戦期における若者と政治との関係史―
<p>審査要旨</p> <p>近代日本史上における青年層を政治運動との関わりから見た場合、日露戦争後から第一次世界大戦後にかけての時期とは、自由民権運動と学生社会運動・地域青年党運動という二つの政治的画期に挟まれた「谷間」の時期にあたる。</p> <p>本論文は先行研究で必ずしも重視されてこなかった当該期の青年層について、中央の政治運動のみならず、地方における活動、日常生活にまで目を配り、そこに独自の意味を読み取ろうとするものである。本論文の特色は、当該の事象を取上げるに当たり、「院外青年」という枠組を設定した所にある。本論文が扱う時期は議会制度の確立過程にあたるが、本論文は直接議席を持たず、議会ないし代議士の周辺を活動の場とした青年達を「院外青年」と位置付け、世代的な特色を見出している。即ち、帝国議会開設前後に生まれ多くが地方出身であること、青年党に代表される政治結社を活動拠点としたこと、演説会・機関誌発行などの言論活動への志向性が強いこと、既成政党から距離をとり自分達の世代意識を優先させた事、第一次大戦後台頭する社会主義に対し議会主義の立場から批判的だったことなどである。</p> <p>本論文は当該の事象を時系列的に詳説した第一部（第一章から第五章）、個別事例・問題を扱った第二部（第六章から第八章、補章）という構成をとる。</p> <p>第一章では日清戦後から日露戦後にかけて、後に「院外青年」を構成する青年層に、世代意識が醸成されていくことが指摘される。日露戦後、論壇の一部を構成した「青年」指導論が明治末に再燃した弁論ブームと相まって、この時代の青年層の政治化を促していった点が強調される。第二章では、「大正政変」、「シーメンス事件」を契機に、「院外青年」が立憲青年党など、世代的な紐帯を鮮明とする運動組織を通じ護憲運動・選挙権拡張運動を展開し、院外政治勢力の一角を占める過程が詳述される。第三章では第二次大隈内閣期における党派対立の激化、ナショナリズムの昂揚を背景に「院外青年」運動が対外硬派へと変容していく過程が考証される。第四章では、第一次世界大戦後の国際協調のもとで、「院外青年」における先行・後発グループ間で運動方針の相違を超えた相互連携が行われ、運動の裾野が拡大した点が検証される。第五章では原敬内閣期に展開される普選運動を牽引した青年改造連盟を素材に学生・労働者・地域青年が「院外青年」を運動面で支え世代的連合体があったこと、その後、運動が拡散して行く中でも、この政治的志向性は持続する点が指摘される。</p> <p>第二部に入って第六章では、「院外青年」運動と併行する地域青年党運動に視点を移し、立憲国民党設立の大日本青年協会を対象に、彼らの活動における「不偏不党」の政治姿勢が設立母体たる政党をも乗り越える政治視野を生んだことが指摘される。第七章では、「院外青年」運動の指導者・橋本徹馬の郷里愛媛県新居郡における産米検査問題を素材に、地域と「院外青年」運動との相互的な影響が指摘される。第八章では、「院外青年」に女性として参入した奥むめおを素材に、運動における婦人問題の認識が考察され、彼らの内では男性を基盤とする同志的連帯が当為とさ</p>	

れ、ジェンダー的意識が希薄であり、婦人記者としての奥の活動を周縁的なものとした点が指摘される。補章では時代を昭和戦前期に移し、「院外青年」のその後を素材に、青年時代の主張との連続面・断絶面が検証される。その上で代議士となった者の間においてすら、所属政党を越えて、思想上或いは党派的異同から離れた世代的な繋がりが認められることが指摘される。

本論文の意義をまとめると、次のようになる。第一に日本近代運動史上、「谷間」の時期にあり、副次的な扱いに止められていた青年層の政治運動について「院外青年」に注目することで、普選運動をピークとする「大正デモクラシー」期の有力な推進主体としての相貌を見出したこと、第二に彼らを媒介した世代意識が議会主義を基調としており、超党派的な持続力を昭和戦前期に入ってから示したこと、第三に彼らの運動が地域における青年党運動と関連しており、その支持基盤が都市部のみならず、地方農村部に到る広範なものだったこと、第四に彼らの思想を特徴付ける道徳主義が同時代の政治批判の上で有効に機能する一方、自らの行動をも縛る結果となり、組織上の分裂の誘因となったこと、第五にこの傾向は彼らの対外問題に関する視点を鈍らせ、大隈内閣期には対外硬派としての相貌を明確にすること、などである。

その一方で、本論文が対象とする時期に次第に都市・地方に限らず青年層に浸透し始める社会主義思想と「院外青年」運動との相関関係に関する言及が十分でないこと、彼らの世代的紐帯を重視する一方で「院外青年」たちが代議士としてのキャリアを重ねる過程で示した既成政治との妥協の部分が過小評価されていること、大正デモクラシー期との関係において青年層を対象とすることによって既存の研究がどのように刷新されるのかが必ずしも明確でないこと、取り上げられた地域事例における「院外青年」像が同時代の地域社会全般に向けて敷衍に耐え得るものかどうか、いまだ検討の余地があることなど、残された課題が散見される。

しかしこれらはいずれも今後の研究によって克服され得る事柄であり、本論文は博士の学位を授与するに足る内容であるものと判断される。

公開審査会開催日	2014年 4月 19 日			
審査委員資格	所属機関名称・資格	博士学位名称	専門分野	氏名
主任審査委員	早稲田大学文学学術院・教授	博士(文学)京都大学	日本近代史	鶴見 太郎
審査委員	早稲田大学文学学術院・教授	博士(文学)早稲田大学	日本近代史	大日方純夫
審査委員	早稲田大学文学学術院・准教授	博士(文学)早稲田大学	日本近代史	真辺 将之
審査委員				
審査委員				